

# コロニー中央病院だより

## 在宅・地域医療支援を拡充していきます

平成19年に策定されました愛知県心身障害者コロニー再編計画では、コロニーは平成24年度から療育医療総合センター(仮称)と名称を変え、中央病院は重症心身障害児施設(こぼと学園)と一緒に医療支援部門を担う予定になっています。中央病院は、在宅・地域医療支援分野を重点化し、心身の発達に障害のある人がより安心して、地域生活を営むことができるように支援することを目指します。

心身の発達に障害のある人をケアされている保護者の方々を支援することは、当院の重要な役割です。ご家族の行事などでケアすることが困難な場合などには、当院がお預かりいたします。現在、お子さんが通院中の方はもとより、お知り合いでお困りの方などを含め、指導相談部もしくは看護相談室にご相談ください。(病院長)

### レスパイト入院・短期入所のご案内

当院では指導相談部が窓口となり、自立支援法の福祉サービス事業として重症心身障害児・者の短期入所の受け入れを行っています。また当院独自に、人工呼吸器をつけている方のレスパイト入院を平成19年度から始めています。こちらは在宅看護相談室と指導相談部で分担して受け付けています。

短期入所・レスパイト入院の状況を表1・2でみると、年々利用が増え続けており、ご要望が大きいことがわかります(2005~2007年度は改築工事でベッド数が制限された)。

近年、自宅で生活している重症心身障害児者で、経管栄養や痰の吸引など医療的ケアを必要とする方が増加しています。胃ろうや気管切開をしている人は増え、人工呼吸器の兄弟がいる場合には、その子のための時間をとることも大切です。

保護者自身の体力や健康に心配を覚える頃、重症心身障害の人も加齢による衰えから新たに医療的ケアが必要になってきたりします。患者さ

んたちの生活は家族の方たちの献身的なお世話の上に成り立っています。そのため地域の中で家族を支えることが絶対に必要です。

その支えのひとつとして、レスパイト(休息)は、欠かせないことです。ところが地域の事業所では看護師の配置が難しく医療的ケアのある人の受け入れはなかなか困難です。建物は古いですが、設備とスタッフの揃った当院は無理なく安心して在宅生活をする手助けとしての重要な役割を担っています。(指導相談部)

表1 短期入所実績

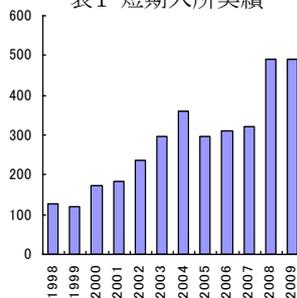
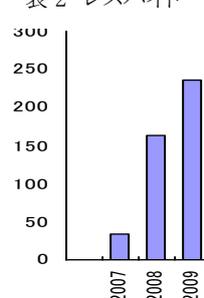


表2 レスパイト



#### ■ 中央病院の理念と基本方針

私たちは成長や発達に支援を必要とする方々により良い医療を提供するように努めます。

- 1 胎児期から成人までを対象とし、患者さんの目線に立ったやさしく安心できる医療を行います
- 2 心とからだの成長・発達に影響する子どもの疾患を総合的に診断し良質な医療を専門的に提供します
- 3 患者さんが自立した生活ができるよう、在宅支援や地域との医療連携を推進します
- 4 成長・発達に影響する病気の原因追究及び、治療法の開発を発達障害研究所やこぼと学園と協力して進めます

## ～ 各診療科の現場から報告 ～

今年度より中央病院の体制が大きくチェンジしました。そこで、前号より3回シリーズで、当院の診療各科の現場でどんなことを行っているかを、患者様にもわかりやすく提示しています。1回目は、小児科、小児神経科、新生児科をご紹介しましたが、今回は、外科系の2科として、小児外科と整形外科です。

### 小児外科

#### 新生児から成人重症心身障害者までの外科診療

小児外科は生まれたばかりの新生児から乳児、幼児、学童、思春期までの小児にみられる外科的疾患（心疾患を除く）を扱っています。とくに新生児疾患は多種多様で発生学を含めた幅広い知識と経験・技術が必要とされます。また、当院では他科の診療とあいまって、重症心身障害の患者さんに対する外科的治療も行っています。現場での診療内容を簡単に説明させていただきます。

地域の産婦人科や市民病院などで生まれた赤ちゃんに何らかの外科的異常があると、電話での依頼を受けて救急車で出向き搬送する体制をとっています。たとえば、食道が閉じている食道閉鎖症や小腸閉鎖症、肛門が閉じている鎖肛などの手術が必要な疾患が対象となります。生後間もなくから呼吸循環障害をきたす横隔膜ヘルニア（横隔膜に欠損があって腸管が胸腔内に脱出する）や嚢胞性肺疾患などには緊急手術を含めて対応しています。また、腹膜炎や腸捻転に対しては緊急手術が行われ、不幸にして小腸が血行障害で壊死に陥っているときには小腸大量切除を余儀なくされます。小腸が極端に短くなった患児は消化吸収が不良で、母乳やミルクのみでは栄養が不足し経静脈栄養の補助が必要になります。これらの経腸栄養と経静脈栄養を上手に併用することで在宅栄養管理への移行が可能となります。さらに、時期を見てこのような短小腸の患者さんに対し何らかの付加手術を計画・実施し、静脈栄養からの離脱を図っています。なお、新生児科医が常勤から嘱託に変わり、NICUを標榜できなくなりましたが、外科的対応は今までどおり行えると考えています。

乳幼児の外科疾患として、鼠径ヘルニア（脱腸）や臍ヘルニア（でべそ）、停留精巣（睾丸が高い位置にある）などが地域の小児科医から紹介されてきます。1泊2日の入院で手術治療をしていま



す。また、嘔吐や体重増加不良、繰り返す呼吸器感染、貧血などを主訴に紹介された患者さんの中には、食道裂孔ヘルニアや胃食道逆流症などがみつかることもあります。したがって、病的な嘔吐例に対してはバリウム造影や食道pH検査、内視鏡検査、内圧検査などを行って逆流防止手術の必要性を厳密に判断します。便秘例に対しても必要に応じて内圧検査や組織検査を行い、ヒルシュスプルング病などの器質的疾患がないかどうかを診断しています。その他、体表のリンパ管腫や胆道系、気道系、泌尿器の疾患などにも積極的に対応しています。最近では小児においても腹腔鏡手術が行われ、また、臍周囲での切開創を多用し傷あとが目立たないように美容的な配慮をしています。

小児外科診療と並び、重症心身障害児・者に対する外科的支援がもう一つの診療の柱と位置づけています。誤嚥性肺炎を含む呼吸障害や嚥下障害などに対し、適応があれば気管切開術や胃瘻造設術、胃食道逆流防止術、喉頭気管分離術、特殊Tチューブ留置などを行なっています。重心児・者に対する看護レベルは高く確立されており、快適できめ細かい対応をめざしています。また、二分脊椎の患者さんの排尿障害にはCIC管理や膀胱拡大術を、直腸機能障害には順行性洗腸路作成なども行っています。

#### 【スタッフ】

常勤医師：飯尾賢治院長、加藤純爾小児外科部長、新美教弘中央検査部長、田中修一医長、毛利純子医長。

非常勤医師：平岩克正医師、水本知博医師

# 整形外科

## 短・長期的未来を予測し、最大限の効果を引き出す治療や訓練を目指して

こんにちは。整形外科です。

一般的に整形外科とは、骨や筋肉、関節、靭帯など（最近ではこれらをまとめて「運動器」と呼びます）を専門に診察する科ですが、コロニー中央病院の整形外科は運動器の中でも特に小児特有の疾患・症状に対して診断・治療を行っています。

おもな対象疾患を挙げると、以下のようなものがあります。

- ・ 上肢疾患（多指症、先天奇形、分娩麻痺）
- ・ 下肢疾患（O脚、X脚、脚長差、先天奇形）
- ・ 運動発達遅滞
- ・ 麻痺性疾患（脳性麻痺や二分脊椎等に伴うさまざまな下肢変形、筋緊張異常）
- ・ 神経筋疾患（筋ジストロフィー、先天性多発性関節拘縮症）
- ・ 骨系統疾患（骨形成不全症、軟骨無形成症）
- ・ 小児股関節疾患（先天性股関節脱臼、ペルテス病、大腿骨頭すべり症）
- ・ 足部変形疾患（先天性内反足、小児扁平足、多趾症、先天奇形）
- ・ 脊椎疾患（側弯症、頸椎不安定症、斜頸）

これら以外にも、長期介護で発生しやすい褥創の治療、近隣の福祉施設等で発生した外傷(骨折など)、さまざまな補装具(車椅子、歩行器など)…と守備範囲は多岐にわたり、新生児から成人まで幅広い年齢層の診療に当たります。

近のトピックスは、コロニーの複数の診療科と協調して行っている、おもに脳性麻痺にみられる痙縮（関節の運動に対し、筋肉の緊張が亢進した状態）



という症状に対する包括的な治療です。整形外科ではボツリヌス毒素製剤を用いた治療や、ギャバロン髄腔内注射による緊張の緩和です。これらの治療や手術を効率的に組み合わせ、リハビリテーション部門と協力してより最大限の治療効果を引き出せるように工夫しています。

整形外科の治療は長期にわたり、手術による入院期間も数ヶ月に及ぶことがあります。就学児童の場合は病室から院内学級へ登校しながら、幼児期には保育を受けながら、それぞれの目標を目指して効率良く治療を行えるよう入院中の環境を整える配慮を病棟全体で行っています。

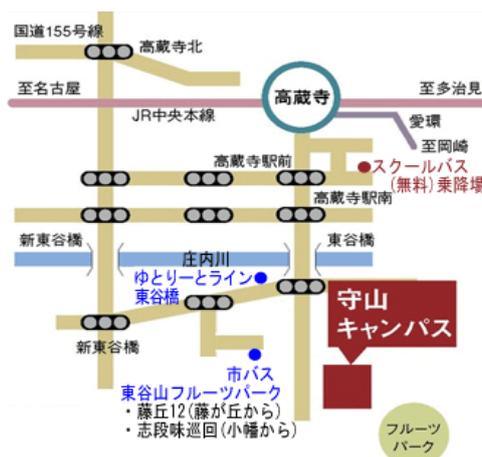
「短期的、長期的未来を予測しつつ、どうしたらその子にとって最大限の効果を引き出せる治療や訓練をおこなえるか」という大いなる命題を日々問いながら診療に励む私たち整形外科をどうぞ宜しくお願いいたします。

〔写真〕 整形外科 常勤医師  
(左より 伊藤、門野、古橋)

## 平成 22 年度 在宅医療講演会のお知らせ

- ◆ 日 時：平成 22 年 12 月 5 日（日） 13 時～16 時半
- ◆ 場 所：愛知県立看護大学
- ◆ 参加申込み法：
- ◆ 講演
 

・ 誤嚥防止対策	小児外科：新美教弘 先生
・ ボトックス治療	整形外科：伊藤弘紀 先生
・ 歯科治療と口腔ケア	歯 科：石黒 光先生
・ 在宅医療機器	臨床工学士：亀井 祐介 さん
・ 患者家族	患者家族：関 靖子さん



# 多師 済 済



中央病院保育士 村上小百合 (写真右)

- ・コロニーに勤務してどのくらいですか。  
8年です。
- ・現在のお仕事の内容、そのために心がけていることを教えてください。

西5病棟に所属しています。

1人1人の子どもの発達や障害の状態、生活や経験などを把握し、他の子どもとの生活を通して、少しでも発達が促されるような保育に努めています。また、様々な体験を通して、豊かな感性を育て、創造性の芽生えを培うことが出来るよう心がけています。

- ・県知事賞を授与されたそうですが、どんなことで頂いたのでか。

昨年度「入院中の子どもたちの生活改善」をテーマに長期に入院生活を送ることを余儀なくされている子どもたちに充実した入院生活を送ることが出来るよう日課の見直しを行い、昨年度実施した保育の内容及び子ども、親、地域の学校からの反響を発表提出したところ、賞を頂けることになりました。

子どもたち、ご家族の皆様には、私どもの方が大変お世話になっており、本当にありがとうございます。今後ともよろしくお願い致します。



中央病院保育士 服部美和 (写真左)

- ・コロニーに勤務してどのくらいですか。  
コロニーに勤務して18年、病院には平成10年から児童精神科・内科に勤務した後、はるひ台学園で勤務し、この春からは小児外科に勤務しています。病院勤務は9年目になります。
- ・現在のお仕事の内容、そのために心がけていることを教えてください。

入院した子供たちの発達支援を中心に、生活支援・家族支援を行っています。当院の特徴である発達支援や生活支援だけでなく、退院した後も十分に発達ができるように他職種との連携を行うようにしています。また、小児病院らしく暖かい雰囲気や壁面装飾も行っています。装飾は各病棟それぞれに個性がありますが、個人的には、病室・処置室・手術室の往復時に子どもも大人もワクワクドキドキが混在するような場所にできればと思います。現在、治療の痛みや恐怖が子どもの精神面に影響を少なくできるような処置室を試みている最中です。

昨年9月、医療保育学会から医療保育専門士の認定を受けました。医療保育士は、平成18年に始まった資格で、今年7月で36名います。幸運なことに、私は愛知県内では第1号の認定でした。

医療保育士は、通常、保育士は医療とは無縁な場所に勤務していて、医療についての知識はありません。そのため、病院で働く保育士は、子供の発達についての知識や支援方法のほか、医療の知識、治療中の保育の考え方が必要ということで研修や認定が始まりました。

今回、資格認定されましたが、基礎的な知識を身に付けたと認められたにすぎません。これからの日々技術向上、研究を行っていくスタートラインに立ったにすぎないと考えています。

## トピックス



当院の医師・保育士・検査技師ら有志の合唱隊が、病院外来に6月16日再び登場し3曲を披露しました。多忙の中、週2回、1ヶ月間の練習を重ねたそうです。最後は「EXILE」の”道”を熱唱。病院の新体制で、お別れしなければならない先生も含まれ、「今日の目を忘れるなど、見慣れた景色、二度と並べない……ゆっくり歩き出そう、この道未来へ続く・・」と。外来だけでなく、各病棟を回って、声が枯れるまで患者合唱されました。